

中国



1 農・畜産業の概況

2021年の中国の国内総生産（GDP）に占める農林水産業の割合は7.6%であり、就業人口に占める1次産業従事者の割合は22.9%となっている（表1）。

また、中国の農林水産業の総生産額は増加傾向で推移しており、2021年は前年比6.7%増の14兆7013億元となった（表2）。部門別の割合について1980年とで比較すると、農業（耕種）は53.3%に減少した一方で、畜産業は27.1%に増加している。

表1 農林水産業の地位

（単位：億元、万人）

区分/年	1980	1990	2000	2019	2020	2021	前年比 (増減率)
GDP	4,588	18,873	100,280	986,515	1,013,567	1,143,670	12.8%
農林水産業	1,372	5,062	14,944	73,577	81,397	86,775	6.6%
割合 (%)	29.9	26.8	14.9	7.5	8.0	7.6	▲0.4ポイント
就業人口	42,361	64,749	72,085	75,447	75,064	74,652	▲0.5%
第1次産業	29,122	38,914	36,043	18,652	17,715	17,072	▲3.6%
割合 (%)	68.7	60.1	50.0	24.7	23.6	22.9	▲0.7ポイント

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

表2 農林水産業総生産額の推移

（単位：億元）

区分/年	1980	1990	2000	2019	2020	2021	前年比 (増減率)
農林水産業	1,923	7,662	24,916	123,968	137,782	147,013	6.7%
農業(耕種)	1,454	4,954	13,874	66,067	71,748	78,340	9.2%
割合 (%)	75.6	64.7	55.7	53.3	52.1	53.3	1.2ポイント
畜産業	354	1,967	7,393	33,064	40,267	39,911	▲0.9%
割合 (%)	18.4	25.7	29.7	26.7	29.2	27.1	▲2.1ポイント
林業	81	330	937	5,776	5,962	6,508	9.2%
割合 (%)	4.2	4.3	3.8	4.7	4.3	4.4	▲0.1ポイント
水産業	33	411	2,713	12,572	12,776	14,507	13.6%
割合 (%)	1.7	5.4	10.9	10.1	9.3	9.9	▲0.6ポイント
その他	0	0	0	6,489	7,030	7,748	10.2%
割合 (%)	0.0	0.0	0.0	5.2	5.1	5.3	0.2ポイント

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

注：総生産額は名目値。

畜産物に関し、2021年の1人当たり年間消費量を見ると、都市部の家きん肉を除き、いずれも前年比で増加している。特に豚肉の消費量は都市部（前年比32.1%増）、農村部（同48.5%増）ともに大きく増加している（表3）。これは、2018年8月に中国で初めて発生したアフリカ豚熱（ASF）の影響により、豚肉の買い控えや家きん肉など他の畜産物への移行などが起きていたが、豚肉は中国の伝統的な食材であり、豚肉供給の回復・安定とともに消費が戻ったためと考えられる。また、品目別に見ると、牛乳乳製品と牛肉については、都市部の消費量が農村部の消費量を大きく上回っている。これは、都市部を中心とした所得向上に伴う外食産業の普及などにより、農村部に比べて牛乳乳製品と牛肉の消費機会が増しているためと考えられる。

表3 畜産物の1人当たり年間消費量

（単位：kg/人）

区分/年	2017	2018	2019	2020	2021	前年比 (増減率)	
都市部	牛乳乳製品	16.5	16.5	16.7	17.3	18.2	5.2%
	牛肉	2.6	2.7	2.9	3.1	3.2	3.2%
	豚肉	20.6	22.7	20.3	19.0	25.1	32.1%
	家きん肉	9.7	9.8	11.4	13.0	12.3	▲5.4%
農村部	牛乳乳製品	6.9	6.9	7.3	7.4	9.3	25.7%
	牛肉	0.9	1.1	1.2	1.3	1.5	15.4%
	豚肉	19.5	23.0	20.2	17.1	25.4	48.5%
	家きん肉	7.9	8.0	10.0	12.4	12.4	0.0%

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

注：家庭での消費量であり、外食や加工品による消費は含まれない。

2 畜産の動向

(1) 養豚・豚肉産業

豚肉は伝統的な食材であり、中国の食肉生産量の約6割を占めている。米国農務省によると、2021年の中国の豚肉生産量と消費量は、それぞれ世界の約4割、約5割を占めており、共に第2位のEUを大きく上回っている。

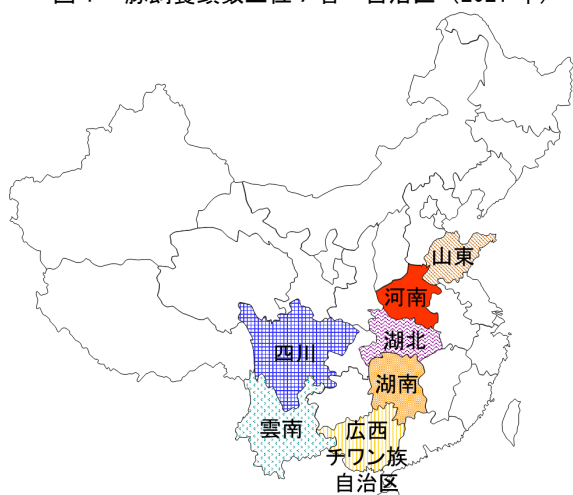
① 養豚の飼養動向

地域別の豚飼養頭数を見ると、山東省以南に多く、また、上位7省・自治区で全体の5割以上を占めるなど、地域的に偏りが見られる（図1、2）。

飼養頭数は2012年以降、減少傾向で推移し、特に19年には前年に発生したASFの影響で3億1041万頭にまで減少した（図3）。その後は豚肉価格の上昇などから飼養頭数は急速に回復し、2021年にはASF発生前の17年と同水準を記録した。

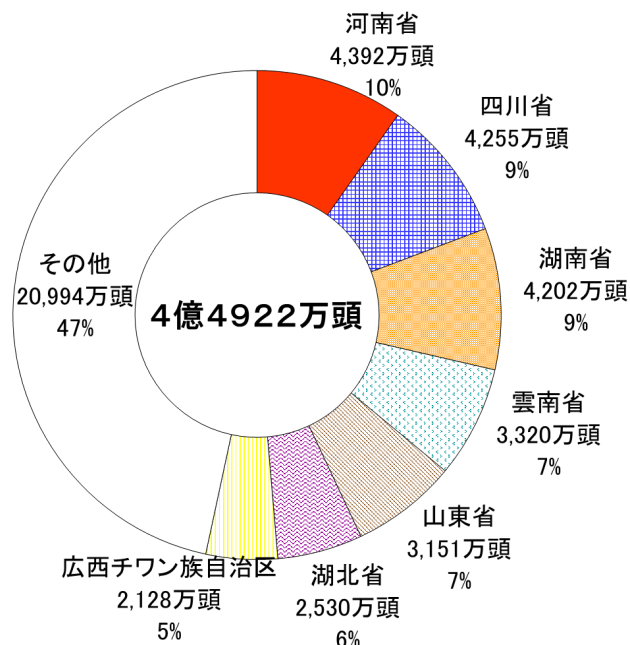
一方で、養豚農家の飼養規模は零細とされる小規模のものが極めて多く、年間出荷頭数が49頭以下の農場が全体の93.5%を占めている（表4）。

図1 豚飼養頭数上位7省・自治区（2021年）



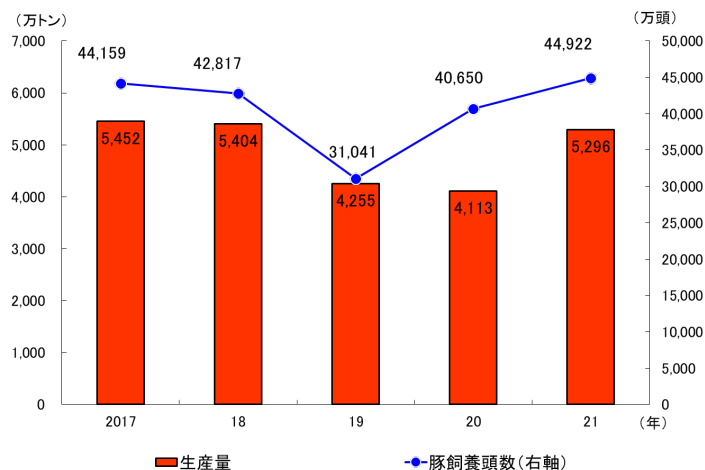
資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

図2 省・自治区別豚飼養頭数（2021年）



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

図3 豚の飼養頭数と豚肉生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

表4 豚の出荷規模別の農場戸数 (2021年)

(単位：万戸)

区分／規模	全体	1～49頭	50～99頭	100～499頭	500～999頭	1,000～2,999頭	3,000～4,999頭	5,000～9,999頭	10,000～49,999頭	50,000頭以上
戸数	2,010	1,879	71	42.4	9.5	5.3	1.45	0.81	0.49	0.08
割合	100.0%	93.5%	3.5%	2.1%	0.5%	0.3%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

② 豚肉の需給動向

豚肉の生産量は、2014年をピークに減少傾向で推移しており、19、20年は、18年に発生したASFの影響が本格化したため生産量が大幅に減少した。しかし、21年は飼養頭数の回復などから生産量は急速な回復を見せ、ASF発生前の17年と同水準にまで回復した(図3、表5)。

消費量は、人口増加や所得向上を背景に増加傾向で推移してきた。2019、20年はASFの影響による豚肉価格の上昇などにより、需要が他の畜種に移行したことで大幅に減少したとみられたが、飼養頭数の拡大につれて価格も安定したことで、21年は消費量も回復した。

2021年の輸入量は、ASFの発生による国内生産への影響から急増した20年比べて減少しているものの、ASF発生前の17年の水準を大幅に上回っている。

表5 豚肉需給の推移

(単位：万トン)

区分／年	2017	2018	2019	2020	2021
生産量	5,452	5,404	4,255	4,113	5,296
輸入量	150	146	245	528	433
輸出量	21	20	14	10	10
消費量	5,581	5,530	4,487	4,152	5,172

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」(生産量)、USDA/FAS「PSD Online」(輸出入量、消費量)

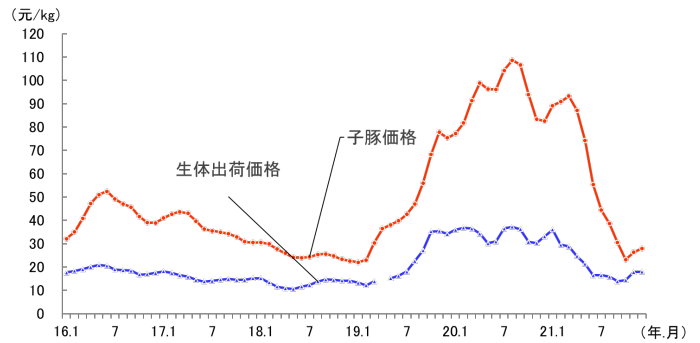
注：枝肉重量ベース。

③ 豚肉の価格動向

2018年に発生したASFの影響から飼養頭数、生産量が減少したため、19年に入り生体出荷価格、子豚価格は共に急騰した(図4)。2019年半ばにASFの感染リスクが低減したとの判断が大勢を占めたことで、増頭機運の高まりから子豚需要が急増し、子豚価格の上昇を牽引した。豚総飼養頭数は2019年末から回復傾向を示していたが、豚肉生産量の回復までには時差があるため、20年の豚肉価格は引き続き高値で推移した。しかし、21年に入り、飼養頭数の回復と豚肉出荷量の

増加により、豚肉価格は急激に下落した。中国政府はこれに対応するため、2021年7月、9月、10月に国家備蓄による豚肉の買い入れを行い、豚肉価格の下支えを行った。

図4 子豚価格、生体出荷価格の推移



資料：中国農業農村部(子豚価格)、中国国家発展改革委員会(生体豚出荷価格)

④ その他

2018年8月に発生したASFは中国全土に拡大し、養豚業に大きな損害をもたらした。その後の19年8月から実施された増頭対策の効果もあり、20年は急速に生産規模の回復を見せ、21年にはASF発生前の水準に生産基盤は回復した。この回復期に大きく生産規模を拡大したのが大手養豚企業である。大手養豚企業は厳格な衛生管理を導入し、農場への人の出入りを最小限に抑えるなどの取り組みを行った。その最たるものとして、住宅地から離れた土地に建設されたビル型の養豚場が挙げられ、大きいものでは20階建て以上の養豚場もあるとされている。



写真1 山東省済南市内の市場での豚肉販売風景



写真2 北京市内のスーパーでの豚肉販売風景

(2) 酪農・乳業

牛乳・乳製品の消費量は、人口増加や所得向上、健康志向の高まりなどを背景に増加傾向にある。2008年に発覚したメラミン混入事件は、国産の育児用調製粉乳などに対する消費者の不信感から輸入需要の拡大につながったが、その後の政府や乳業による信頼回復への取り組みなどを通じ、近年は、国産需要が高まりつつある。

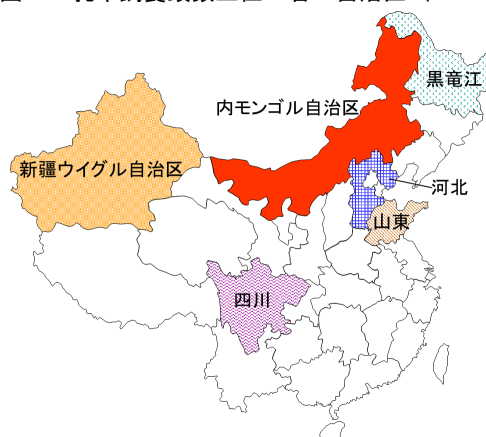
国連食糧農業機関（FAO）のデータによると、2021年の中国の生乳生産量（水牛を除く）は、前年から順位を1つ上げ世界第3位であり、全世界の生乳生産量の5.0%を占める。

① 乳用牛および生乳の生産動向

地域別の飼養頭数を見ると、冷涼な中国北部で多く、上位6省・自治区で全体の約6割の頭数を占めている(図5、6)。飼養頭数は国内需要を背景に2008年ごろまで急速に増加したが、それ以降は横ばいで推移しており、20年は、前年並みの1,094万頭であった(図7)。

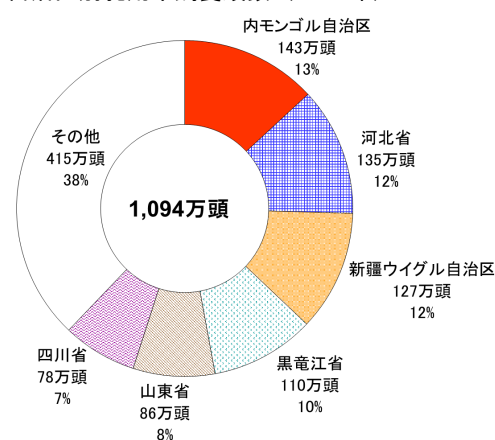
また、飼養農場の規模は、飼養頭数49頭以下の農場が全体の97.2%を占めている(表6)。

図5 乳牛飼養頭数上位6省・自治区(2021年)



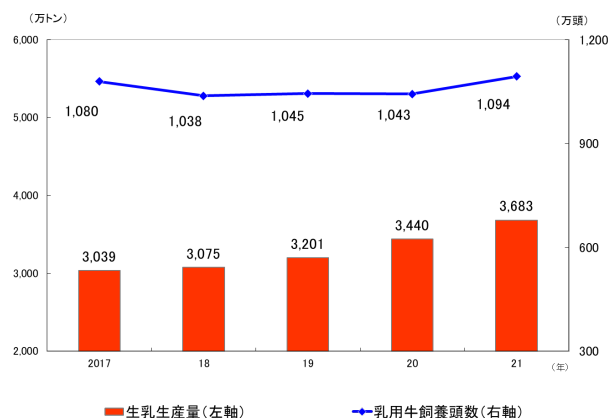
資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図6 省・自治区別乳用牛飼養頭数(2021年)



資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図7 乳用牛飼養頭数と生乳生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」(生乳生産量)、中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」(飼養頭数)

表6 乳用牛の飼養規模別農場戸数（2021年）

（単位：千戸）

区分／規模	全体	1～49頭	50～99頭	100～199頭	200～499頭	500～999頭	1000～1999頭	2000～4999頭	5,000頭以上
戸数	462.5	449.5	6.5	2.2	1.6	1.3	0.8	0.5	0.2
割合	100.0%	97.2%	1.4%	0.5%	0.3%	0.3%	0.2%	0.1%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

② 牛乳・乳製品の需給動向

生乳の生産量は増加傾向で推移する一方、乳製品需要の高まりから製品原料などに利用される全粉乳や脱脂粉乳、直接消費としての飲用乳などの輸入量はいずれも増加傾向で推移している（表7）。また、主に豚の飼料として利用されるホエイの輸入量は、ASFの鎮静化に伴い、2020年以降、堅調に増加している（前年比15.3%増）。育児用調製粉乳の輸入量については、新生児数の減少や国産志向などにより減少している（前年比21.7%減）。

表7 乳製品輸入量の推移

（単位：万トン）

区分／年	2017	2018	2019	2020	2021
全粉乳	47	52	67	64	85
ホエイ	53	55	45	62	72
飲用乳	67	67	89	104	127
脱脂粉乳	25	28	34	34	43
育児用調製粉乳	30	33	36	35	27
チーズ	10.8	10.8	11.5	12.9	17.6
バター	9.8	12.0	9.1	12.3	13.9
ヨーグルト	2.8	2.7	3.2	2.8	2.5

資料：USDA/FAS「PSD Online」（全粉乳、飲用乳、脱脂粉乳、チーズ、バター）、「Global Trade Atlas」（ホエイ、育児用調製粉乳、クリーム、ヨーグルト）

注：HSコードは、ホエイは040410、育児用調製粉乳は190110、ヨーグルトは040310。

乳製品のうち、多用途で用いられる全粉乳（育児用調製粉乳や還元乳のほか、ヨーグルト、アイスクリーム、焼き菓子などの原料として使われる）の需給を見ると、2021年の消費量は前年比14.0%増の181万トンとなった（表8）。また輸入量は、2013～14年にかけて、当時、猛暑や小規模農家の離農の加速などによる生乳の減産を背景に乳価が高騰したことを受け、輸入が大幅に増加したことで在庫が積み上がったことから、15年以降は減少していたが、その後の需給ギャップの解消から21年の輸入量は85万トンとなった。主な輸入先はニュージーランドであり、同国は中国とのFTA締結による関税削減の恩恵を受けて（注）全粉乳輸入量の9

割を占めている。

注：枠内無税（2020年）。枠外の最恵国税率は10%。

表8 全粉乳需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2017	2018	2019	2020	2021
生産量	108	97	105	99	101
輸入量	47	52	67	64	85
輸出量	0.2	0.2	0.1	0.1	0.2
消費量	160	153	172	159	181

資料：USDA/FAS「PSD Online」

また、脱脂粉乳は、全粉乳に比べて消費量が少ないものの、近年は増加傾向にあり、輸入も伸びている（表9）。脱脂粉乳は、中国国内でバターやクリームを製造する設備が少ないため、国内生産よりも輸入量が多いことが特徴的である。

表9 脱脂粉乳需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2017	2018	2019	2020	2021
生産量	3.0	2.0	1.5	2.0	2.2
輸入量	25	28	34	34	43
輸出量	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2
消費量	28	30	36	36	45

資料：USDA/FAS「PSD Online」

飲用乳の消費量は、2015年をピークに減少していたが、18年以降は増加に転じ、21年は前年比7.3%増の3920万トンとなった（表10）。特にコロナ禍では、政府が乳製品の消費を推奨したことも消費量の増加に寄与している。

表10 飲用乳需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2017	2018	2019	2020	2021
生産量	3,189	3,225	3,298	3,550	3,795
輸入量	67	67	89	104	127
輸出量	2.3	2.7	2.5	2.5	2.3
消費量	3,253	3,290	3,384	3,652	3,920

資料：USDA/FAS「PSD Online」

英国の市場調査会社であるユーロモニターインターナショナル社によると、2021年の主な牛乳乳製品のの小

売販売数量について、ヨーグルトが減少しているのに対し、牛乳とチーズは増加しており、中でも、チーズの増加が著しい（前年比29.4%増：表11）。牛乳については、地方を中心にコールドチェーンが未成熟なことから、ロングライフ（LL）牛乳が広く普及（牛乳販売量の8割程度）しているが、近年では都市部を中心にコールドチェーンが整備され、価格の高い冷蔵牛乳も流通している。ヨーグルトについては、常温の飲むタイプのヨーグルトを中心に普及している。また、チーズは、プロセスチーズが販売量の8割程度を占め、ピザやハンバーガーなど外食需要を中心に消費が広がってきた。近年では、子供用のスティックチーズなどを中心に、家庭での消費も増加しつつある。

表11 主な牛乳乳製品の小売販売数量の推移
(単位:万トン、千万リットル)

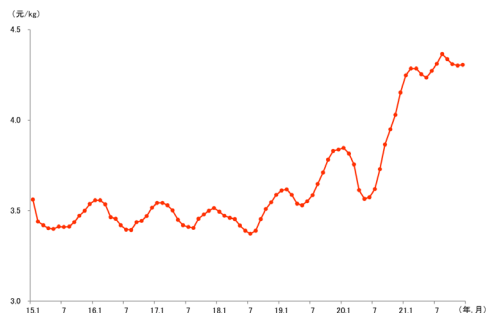
区分/年	2017	2018	2019	2020	2021
牛乳	885	885	900	943	988
うちLL	749	741	747	784	806
うち冷蔵	136	144	153	158	183
フレーバーミルク	700	648	614	565	595
ヨーグルト(液体)	681	750	820	805	778
ヨーグルト(それ以外)	174	180	183	173	165
チーズ	3.6	4.0	5.2	7.4	9.6

資料：ユーロモニターインターナショナル社
注：ヨーグルト（液体）はリットル、それ以外はトン。

③ 生乳価格動向

生乳価格は、2013年夏の記録的な猛暑で生産が減少したことで同年後半から上昇したが、その後下落し、15年以降は安定して推移していた（図8）。19年以降は堅調な需要に後押しされ、季節的な変動はあるものの上昇傾向にある。特に20年後半からは、1キログラム当たり4元を超える高水準で推移している。

図8 生乳の農場出荷価格の推移



資料：中国農業農村部
注：主要生産省・自治区（河北、山西、内モンゴル、遼寧、黒龍江、山東、河南、陝西、寧夏、新疆）における農場出荷価格の平均。これら10省・自治区で生乳生産の8割を占める。

④ 販売風景

冷蔵牛乳の販売風景は日本と同様で、常温保存が可能なLL牛乳は、飲み切りサイズのを10～20個程度（写真は190ml×15個入り）まとめて厚紙で包装し、目立つ印刷を施して売られている点が特徴的である（写真3、4）。

また、一部のLL牛乳や飲むヨーグルトは、ビニールパックに入った製品も販売されている（写真5）。

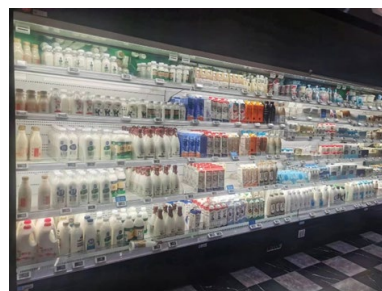


写真3 スーパーでの乳製品の販売状況（北京市内）



写真4 LL牛乳（北京市内）



写真5 飲むヨーグルト（北京市内）

(3) 肉牛・牛肉産業

① 飼養動向

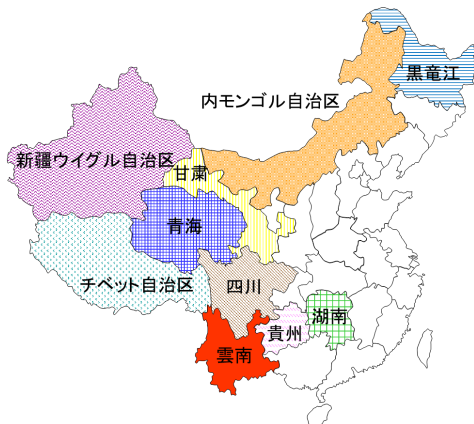
中国で商業的な肉用牛の生産が始まったのは1990年代と言われており、それまで牛は、主に役畜として飼

われていた。肉用牛として飼育されているのは、主に黄牛（在来種）とシンメンタル種の交雑種である。最近では、品種改良の観点などからアンガス種などの生体牛輸入も増えている。

飼養頭数を地域別に見ると、役畜として利用されてきた内陸部での飼養頭数が多く、飼養頭数が400万頭以上の上位10省・自治区で全体の約7割を占めるなど偏在している（図9、10）。また、飼養農家は零細が極めて多いのも同様で、年間出荷頭数が9頭以下の農場が全体の92.6%を占めている（表12）。

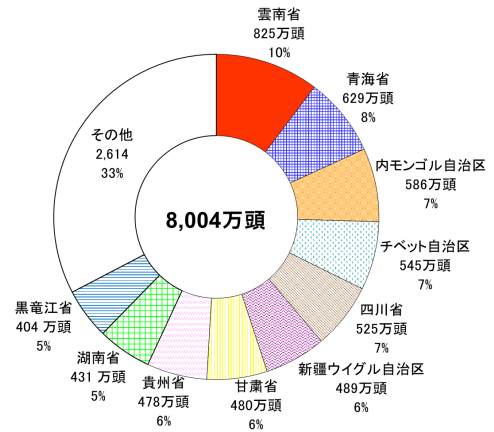
飼養頭数と牛肉生産量の推移を見ると、共に増加傾向で推移しており、2021年の飼養頭数は8004万頭、牛肉生産量は698万トンとなった（図11）。米国農務省によると、21年の中国の牛肉生産量は、米国、ブラジルに次ぐ世界第3位（米国の5割強）であり、全世界の生産量の約1割を占めている。また、中国の牛肉は伝統的に豚肉を食さないイスラム教徒による消費が多く、ハラールの牛肉が多く売られているのも特徴とされる。

図9 肉用牛飼養頭数上位10省・自治区（2021年）



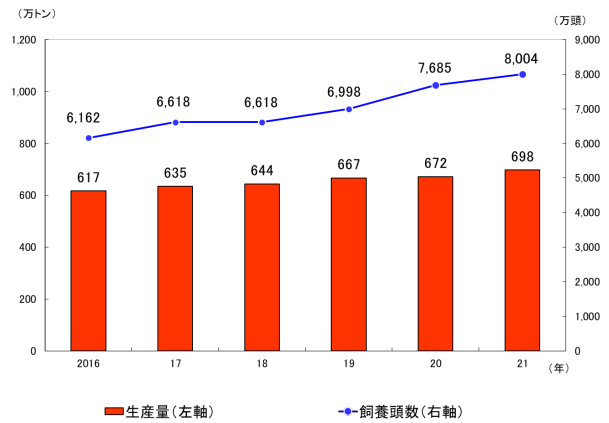
資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図10 省・自治区別肉用牛飼養頭数（2021年）



資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図11 肉用牛飼養頭数と牛肉生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生産量）、中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」（飼養頭数）
注：2016年の飼養頭数は中国国家统计局の統計値からALICで推計。

表12 肉用牛の出荷規模別の農場戸数（2021年）

（単位：万戸）

区分／規模	全体	1～9頭	10～49頭	50～99頭	100～499頭	500～999頭	1,000頭以上
戸数	755.7	699.8	45.2	8.0	2.4	0.3	0.1
割合	100.0%	92.6%	6.0%	1.1%	0.3%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

② 需給動向

牛肉消費量は長期にわたって増加を続けており、2021年は999万トンとなった（表13）。一方、国内の牛肉生産量は増加しているものの、拡大する需給ギャップを埋めるべく、輸入量も急増している。同年の主な輸入相手先国はブラジル（輸入量全体の4割弱）、アルゼンチン（同2割）、ウルグアイ（同1割強）、ニュージーランド（同1割弱）となった。現地専門家の中には、別途、統計に表れない相当量の非正規輸入品が中国の国内市場に流通しているとの見方があるが、詳細は不明である。

表13 牛肉需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2017	2018	2019	2020	2021
生産量	635	644	667	672	698
輸入量	90	137	218	278	302
輸出量	2.1	2.1	2.1	1.6	1.7
消費量	724	781	883	949	999

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生産量）、USDA/FAS「PSD Online」（輸出入量、消費量）

注：枝肉重量ベース。



写真6 スーパーでの冷蔵牛肉販売風景（上海市内）



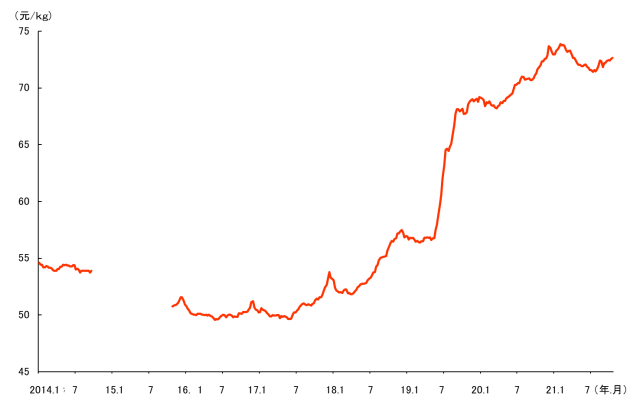
写真7 スーパーでの冷凍牛肉販売風景（北京市内）

「和牛」ラベルが貼られた豪州産 WAGYU も販売されている。

③ 価格動向

牛肉の牛肉卸売価格は、需要の拡大に伴い2014年に高水準となったが、15年後半以降は輸入量の増加から下降基調で推移していた。2018年以降は、中国国内でのASF発生の影響による豚肉価格の上昇に伴う代替需要や外食需要の高まりなどから、一転して上昇傾向で推移した（図12）。2021年に入り下落に転じたものの、引き続き高値で推移している。

図12 牛肉卸売価格の推移



資料：中国商務部

注：2015年のデータは公表されていない。



写真8 スーパーでの冷凍牛肉販売風景（北京市内）。

「清真」（ハラール）マークがついている商品も多い。

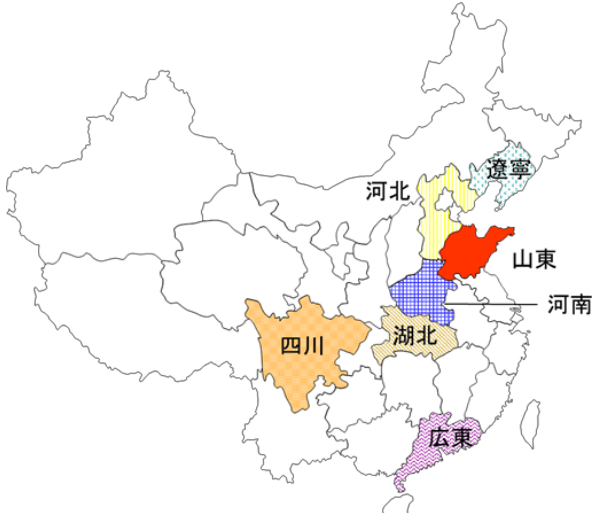
（４）肉用鶏・鶏肉産業

① 飼養動向

鶏肉は、豚肉に次いで多く消費される食肉である。肉用鶏の品種は、約半数が白羽肉鶏と呼ばれる海外品種で、残りは黄羽肉鶏と呼ばれる在来品種などである。近年では小型の白羽肉鶏の育種・改良により、独自品種の普及が進められている。

地域別の飼養羽数を見ると、渤海沿岸部から内陸部での飼養が多く、上位7省で全体の5割強を占めている(図13、14)。家きんの飼養羽数は、13年に発生した鳥インフルエンザにより一時的に減少したが、その後は増加に転じている。また、18年に発生したアフリカ豚熱の影響により豚肉生産量が減少したことから鶏肉の代替需要が高まり、19年以降は増加基調にある。(図15)。ただし、飼養規模は零細なものが極めて多く、年間出荷羽数が2000羽に満たない経営が98.7%とかなりの割合を占めている(表14)。

図13 家きん飼養羽数上位7省

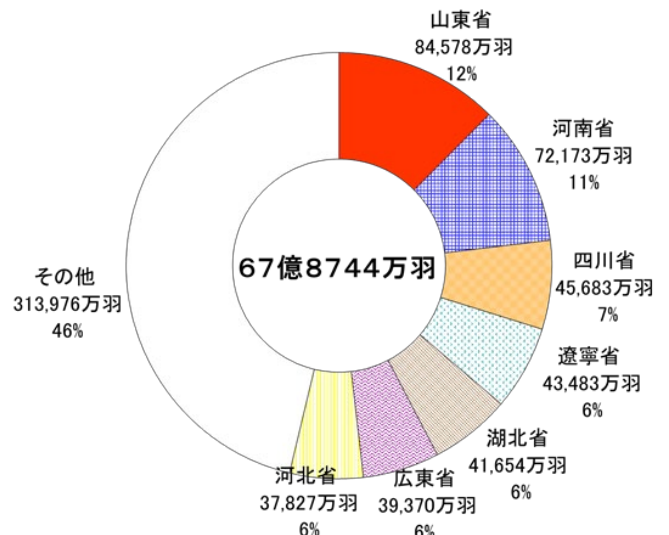


資料：中国農業部 「中国畜牧獣医年鑑」

21年の家きん肉の生産量は、1470万トン(前年比0.7%増)とわずかに増加した(図15)。米国農務省によると、中国の鶏肉生産量は米国に次いで世界第2位となり、世界の生産量の14.5%を占めている。

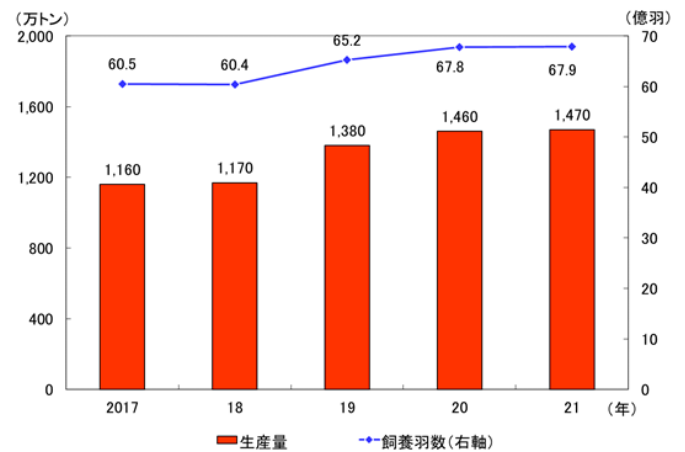
(注)「家きん」はブロイラー(肉用鶏)や採卵鶏、アヒルなど。

図14 省・自治区別家きん飼養羽数(2021年)



資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図15 家きん飼養羽数と家きん肉生産量の推移



資料：USDA/FAS「PSD Online」(生産量)、中国農業部「中国畜牧獣医年鑑」(飼養羽数)

表14 家きん(肉用)の出荷規模別の農場戸数(2021年)

(単位:万戸)

区分/規模	全体	1~1,999羽	2,000~9,999羽	1万~29,999羽	3万~49,999羽	5万~99,999羽	10万~499,999羽	50万~999,999羽	100万羽以上
戸数	1,826.5	1,802.1	12.6	5.8	2.8	1.8	1.1	0.1	0.2
割合	100.0%	98.7%	0.7%	0.3%	0.2%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%

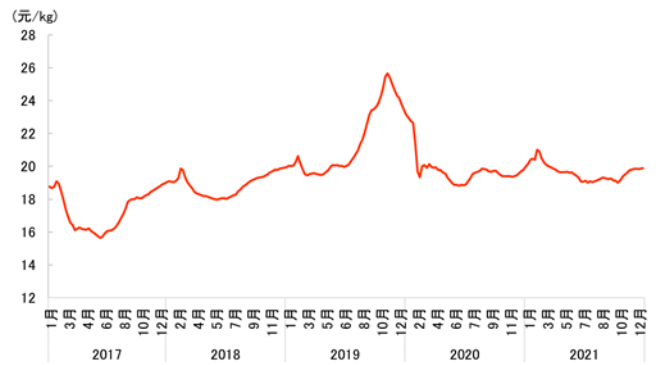
資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

2021年の鶏肉輸入量は、78万8000トンと前年を大幅に下回った。これは、20年に豚肉からの代替需要で鶏肉輸入量が増加したことの反動によるものである。また、代替需要が落ち着く中で、COVID-19による物流への影響もあったとみられる。

一方、21年の鶏肉輸出量は、鶏肉調製品を主体に45万7000トンと前年を大きく上回った。主な輸出相手先は日本（輸出量全体の約7割）となっている。同年の日本向けは、COVID-19の影響により業務用需要が低迷していたものの、惣菜用などを中心に数量を伸ばしたとみられる（表15）。

また、鶏肉の卸売価格を見ると、16年12月以降、国内でヒトへの鳥インフルエンザ（H7N9型）の感染が多数報告されたことで、政府による生体家きん市場の閉鎖から直接小売店への丸どり供給量が増加したため、17年に入り大きく下落した。その後は供給量が安定し、同年後半以降は16年を上回る水準まで回復した（図16）。その後、ASFの流行による豚肉生産量の減少から、鶏肉需要が拡大した影響で、19年の卸売価格は高騰している。19年末から20年にかけて、鶏肉の供給体制がある程度整い、さらにCOVID-19による需要の減少も一因となり、急落した。20年後半になると、外食需要が多少の回復を見せたことからやや上昇した。21年は春節以降、COVID-19の影響や豚肉価格下落の影響を受け、下落傾向で推移するも、食肉需要が旺盛となる冬期に向け、11月以降は上昇傾向となった。

図16 鶏肉（丸どり）の卸売価格の推移



資料：中国農業部「中国農業発展報告」



写真9 市場での丸どり販売風景（山東省済南市内）



写真10 市場での生鳥販売風景（山東省済南市内）

表15 鶏肉需給の推移

(単位：万トン)

区分／年	2016	2017	2018	2019	2020	2021
生産量	1,245	1,160	1,170	1,380	1,460	1,470
輸入量	43	31.1	34.2	58	99.9	78.8
輸出量	38.6	43.6	44.7	42.8	38.8	45.7
消費量	1,249	1,148	1,160	1,395	1,521	1,503

資料：USDA/FAS「PSD Online」

（５）飼料穀物

中国はトウモロコシを重要作物の一つと位置付け、需給の安定を図るための穀物備蓄政策を実施してきた。しかし、最低買付価格を保証する備蓄政策の実施などでトウモロコシ在庫が積みあがったことから、2016年4月にはこの保証政策を見直し、市場買い付けに移行した。

トウモロコシの国内生産量は、飼料需要の拡大などを背景に増加基調にあり、21/22年度は過去最高を記録した（表16）。また、消費量も、飼料向けを主体にでん粉原料など工業向け需要の拡大により同じく増加基調で推移している。この結果、同年度の輸入量は前年度に次ぐ2千万トン台を維持している。生産量を地域別に見ると、東北3省（黒竜江、吉林、内モンゴル自治区）で全体の3分の1、さらに上位10省で約8割を占めている（図17、写真11）。

表16 トウモロコシ需給の推移

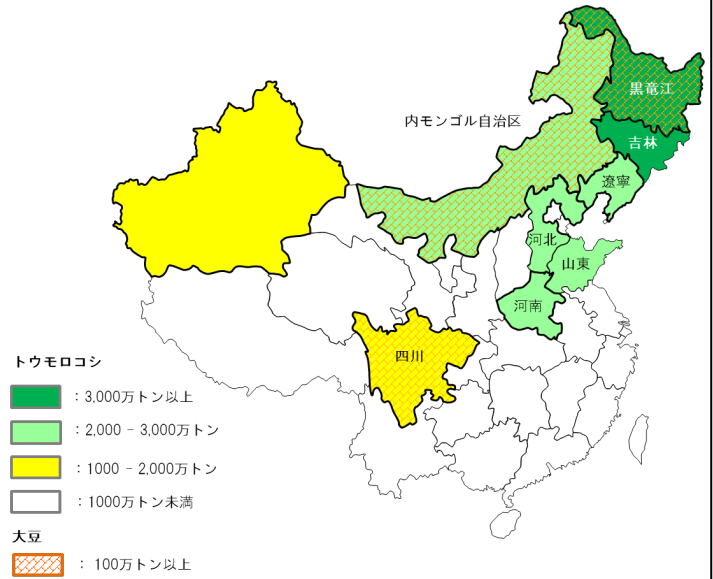
(単位: 万トン)					
年度	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22
作付面積(万ha)	4,234	4,213	4,128	4,126	4,332
総供給量	48,556	48,420	47,854	49,071	50,014
国内生産量	25,907	25,717	26,078	26,067	27,255
期首在庫	22,303	22,254	21,018	20,053	20,570
輸入量	346	448	758	2,951	2,188
総需要量	26,302	27,402	27,801	28,500	29,100
国内消費量	26,300	27,400	27,800	28,500	27,400
飼料向け	18,700	19,100	19,300	20,300	20,900
食用・工業向けなど	7,600	8,300	8,500	8,200	8,200
輸出量	2	2	1	0	3
期末在庫	22,254	21,018	20,053	20,570	20,914

資料: USDA/FAS「PSD Online」

注1: 生産年度は10月～翌9月。

注2: 総需要量=国内消費量+輸出量。

図17 トウモロコシおよび大豆の生産分布 (2021年)



資料: 中国国家统计局



写真11 中国のトウモロコシ畑 (吉林省)

一方、大豆については、食用油原料用途のみならず、搾油後の大豆かすが家畜飼料原料に利用されているため、これら国内需要の拡大を背景に大量に輸入されている。21/22年度の大豆の国内生産量1640万トンに対し、輸入量は9050万トンとなった（表17）。このため、近年の中国のトウモロコシや大豆の輸入動向は、世界の穀物相場を大きく左右させる要因となっている。

表17 大豆需給の推移

(単位：万吨)					
年度	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22
作付面積(万ha)	825	841	933	988	842
総供給量	12,950	12,157	13,503	14,397	13,775
国内生産量	1,528	1,597	1,809	1,960	1,640
期首在庫	2,012	2,306	1,840	2,461	3,086
輸入量	9,410	8,254	9,853	9,976	9,050
総需要量	10,643	10,212	11,042	11,281	10,850
国内消費量	10,630	10,200	11,033	11,274	10,840
飼料向け	390	410	473	504	520
工業向け	9,000	8,500	9,150	9,300	8,790
食用向け	1,240	1,290	1,410	1,470	1,530
輸出量	13	12	9	7	10
期末在庫	2,306	1,946	2,461	3,116	2,925

資料：USDA/FAS「PSD Online」

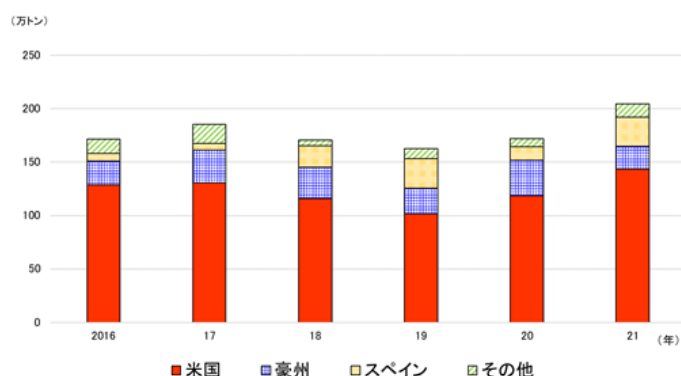
注1：生産年度は10月～翌9月。

注2：総需要量＝国内消費量＋輸出量。

注3：搾油向けは「工業向け」に含まれる。

また、生乳生産が拡大する中で、乳牛の飼料として乳量増加や乳質向上効果の高いアルファルファなど飼料用乾草の輸入量も増加基調にある（図18）。これら輸入は主に乾草であり、ミールやペレット状のものは少ない（写真12）。近年では米国からの輸入が過半を占め、豪州やスペインからの輸入が続いている。

図18 アルファルファなどの輸入量の推移



資料：「Global Trade Atlas」
注：HSコード121214。



写真12 輸入アルファルファ（天津市）